

暮らしを支えるみなとの情報誌
Vol.98 June 2021

港湾

特集



鉄道とみなと

稿

鉄道とみなとを巡るものがたり

奇

株式会社機芸出版社「鉄道模型趣味」編集長
名取紀之

別

みなとと鉄道概論

特

株式会社カスレールウエイコンサルタント代表取締役社長
田中一弘

6

月号

「新連載」
日本通産
北前船がつなぐ港



公益社団法人日本港湾協会
The Ports and Harbours Association of Japan

新潟港の北前船主・小澤家

はじめに

江戸時代のはじめ頃、加賀・細坪から越後・長潟に移住してきたと伝わる家があります。その家は小澤家といい、後に分家して、うち一家は信濃川河口左岸の新潟町（新潟港）に移住してきました。そして新潟町・小澤家は元々営んでいた在宿という米売買の仲介等を行う仕事に加えて、明治初年から買積廻船（いわゆる「北前船」、新潟では「廻船」と呼ぶ）を始め、さらに明治20年代には廻船取引の仲介を行う廻船問屋の経営を始め、成長していました。



明治23年頃の新潟港の様子（新潟市歴史博物館所蔵）

小澤家の経営

小澤家の廻船経営は明治7年（1874）から本格的に始まりました。同家が最初に単独で所有したのは観徳丸という船で、次に幸運丸という船を購入し、以降2艘体制で経営しました。「仕切」等の史料の残存状況が良く、実態が詳しく分かる明治9年の場合、観徳丸の経営は①瀬戸内・四国・九州の諸産物を買って新潟で売る、②越後米を北海道で売る、③北海道の鮭等を買って瀬戸内・大阪で売る、また幸運丸の経営は①新潟で米・酒等を買って北海道で売る、②北海道で鮭・鮭等を買って下関等で売る、③三田尻で塩を買って新潟で売る、とまとめられます。ちなみに明治19年4月14日「新潟新聞」中に「越後国海運の成績」という越後海運の状況全般をまとめた記事がありますが、そこには「船舶に搭載する品物は越後より輸出するものは米穀を主とし北海道廻りは塩及び魚類を主とす、而して大坂地方に廻漕するものは先づ馬関に寄港して其相場気配を考ひ尾の道、兵庫を経て大坂に入り或ひは境、貝塚にも進み利あるの地に就きて之を売却して前の諸港より塩及び砂糖其他織物、綿、生蠶等を購求し直江津、柏崎、寺泊、新潟及び酒田、秋田、北海道へ回漕せしといふ」とあり、小澤家両船

の経営もこの特徴と重なる動きをしていたことが分かります。

その後、小澤家は他の富商と姻戚関係等を通じて結びつきながら、明治29年には新潟運送会社、翌年には新潟曳船株式会社、新潟船株式会社設立に参加して各社の役員となり、さらに明治40年代には外国米・大豆粕、石炭・コークス、キリンビールをはじめとした酒やサイダー類の販売、保険代理業、さらに米スタンダードオイル社代理店として石油販売も手がけ経営を多角化していきました。こうして小澤家は新潟市を代表する財閥の一つとなり、その後も財界人や政治家を輩出していきました。

旧小澤家住宅

ところで、この小澤家が廻船経営をしていた頃の屋敷が今ものこっています。約1600平方メートルの敷地のなかにある建造物7棟は新潟町屋敷の佇まいを伝えるものとして、平成18年（2006）に市文化財に指定され平成23年から「旧小澤家住宅」として一般公開されています。屋敷の外観は道に底を出した上に張り出すように二階部分をつくる「張り出し二階」や、柱の上部から腕木を出して桁を載せる「せがいで造り」等の特徴がみられます。この「せがいで造り」は軒先を立派に見せるだけでなく積雪にも強い構造とされています。また屋敷の内部は表通りに面した部分に営業空間である店があり、そこから奥の生活空間までを「通り土間」が繋いでいます。また座敷・仏間などの祝儀・不祝儀に使われた格の高い部屋は店のすぐ裏に配されています。こうした特徴はかつて新潟町に軒を連ねた町家によくみられたものでした。この小澤家住宅は現在新潟市内で北前船が行き交っていた頃の趣を感じることができる貴重なスポットの一つとなっています。当市にお越しの際は是非お立ち寄りください。



旧小澤家住宅（所在地：新潟市中央区上大川前通12）